

漢法苞徳塾資料	No. 107
区分	
タイトル	四診法論
著者	八木素萌
作成日	1992.01.30

〔1〕体表に表現される生理的病理的反応には

- a. 体質・素因・ライフスタイルなどの表現としてのもの
- b. 病因の五行性に応じた生理的病理的な表現としてのもの
- c. 病理的産生物に対応した反応を表現したもの
- d. 病んでいる臓腑を示している反応を表現したもの
- e. 季節変化・運氣に対応した反応を示すもの
- f. 経脈・経筋の変動を表現した反応を示すもの
- g. 子午・運氣に応じる穴の開闔を表現しているもの

これらのような7側面がある。これをそのまま立体的・層的に把握して、反応の帯びている生理的病理的な意味合いを解釈出来なければならない。

- 〔2〕体表に表現されている生理的病理的表現とは、もともと多彩なものである。咳嗽・下痢・浮腫・疼痛・痙攣・運動障害等々の症状は、当然の事であるが、病証学・臓象学的に解析されることが極めて重要である。しかし、患者が自覚していないとか、問題にもしていないような、諸変化・諸反応を見落とす事のないようにして、それらの現象を、一貫した病証イメージとして統一的に解釈し説明できる事が、不可欠である。それが可能となるのは、診察者の医学的な力量であるから、我々は病症学・臓象学・病機学・診断学その他の医学の学術水準を絶えず研鑽し続けなければならない。此処に言う諸変化・諸反応とは、体表に観察されるものの全てのことである。皮膚色調・イボ・アザ・タコ・傷痕・甲錯・形状変容（変形・梗結、ひきつれ、索状物、虚濡、陷下、弛緩、肥厚、腫、脹、膨隆、血腫など）・皮膚温（熱、温、冷、涼など）・湿・燥・ヒビ・軟・濡・緊・堅・硬・濡・細絡・痒・シミ・癢やチック・萎え・強張り・皮膚のタルミまたは弾性・筋肉の質や弾力などや、その他の微細な変化を指している。それらの変化の表われている部位の帯びている、臓腑経絡的な意味を把握する必要があるのである。

四診法を用いて診断学に照らして、これらの変化を把握し意味付けようとするのである。

〔3〕四診法は次のような診察法を用いて実現するものである

a. 八虚診

『靈樞』邪客第71に記述され、秦伯未『中医入門』にも記述された方法で、五臓（邪の所在する、病の所在する）の辨別に、便利で有用である。

b. 背候診

内傷・痼疾・体質傾向・季節的影響や運氣に関するもの等を、臓腑分類的に把握できる。

◆腧穴反応……陰証反応・体質傾向に特有の反応・季節的反應や運氣的反應等を診るのに重要

◆脊椎棘間反応……上に同様で病的異常は診易い

c. 腹診

臓腑分類と「痰」「飲」「瘀」などの病理的産生物の把握、燥屎、煩躁、また積聚、抗病力の度合い、生命力の程度等を診断、近年に経絡変動の反應を診る方法も開発されている。

◆最も基礎的なものとしては『難經』の「十六難」「五十六難」に記述されている方法で、五臓分類の診察方法である。

◆募穴反應は主に外邪性の臓腑反應を診る。

◆腹壁の弾力は基本的な体力・抗病力を診る。

◆皮と肉の連接の具合は氣血交流の状況を現わしている。氣の衰えは皮のたるみとなり皮肉の連接の弛緩となる、氣血の并証では皮肉が并着する。故に回復力、抵抗力を診る方法となる。これは、更に臍索・臍輪の状態や腹壁の弾力などとともに喉嚨診や彈蹠診をも併用して考察する事が良い。

◆臍輪の状態は病の深さを示し、臍索の状態は抗病力・生命力の程度を現わす。

◆白線つまり腹部正中線は生命力の度合いを示すものである。

〔註〕 腹診、背候診・八虚診については塾の反應型図を利用すると便利であろう。

d. 舌診

氣血津液の状況と瘀を把握できる。

◆舌苔…氣の消息、痰と湿濁の消息

◆舌質…血の瘀と清、寒と熱、津液代謝、血の機能状況など陰の消息

◆唾液…粘と淡、多い少ない、によって津液の消息、津液に対する寒熱の影響状況などの消息

◆齒齦と頬（粘膜）と四白（口角）…肌肉、血の瘀や機能的活性度（栄養力と抗病力）や濃淡、骨肉の親和度（先天と後天の関係）、胃脾の寒熱や活力度、などの消息

◆舌面の部位…舌尖は肺・心、舌央は胃・脾、舌根は腎、舌縁は肝・胆の消息を示すと見る説が、最も有力

e. 尺皮診

病因分類と病臓分類ができる。

f. 切経診

主に肘・膝より末端へかけて、(五腧穴・郄穴・絡穴など)で変動経と病臓への病因影響が判断でき、特異穴では病因の判断、病の陰陽の判断などができる。八虚診では病臓と病因の判断、体幹部では、病んでいる臓腑・経絡・抵抗力・内外・病的産生物・病の陰陽その他を判断する。

g. 脈診

外感・内傷の判断、五臓と病因の判断、病位の判断、病の順逆や陰陽の判断、その他。

h. 問診

他の診察から更に確認したいこと、現病歴、疾病歴、社会的存在、家族状況、心理的傾向、嗜好、その他問診でなければ知り得ない事項、他の診察法では判からない症状など。

i. 蒙色

病色が表われるので、蒙色十則によって、また臓象論によって、病臓・病位・病勢・病の緩慢・内向の傾向か外達の傾向か・治癒に向かっているかそうでは無いのか・病の新旧、等その他が判かる。

j. 運動診

変動している経絡は「チバム」ので、経絡の走行部位を過伸展の状態にすると痛みや異和感が生じ、運動がやや窮屈であるように見えたり、不完全に見えたりする、自覚的にも他覚的にも判かる。

k. 聞診

グル音・クリック音・呼吸音・声の特徴・その他の体の発する音や、臭気によって判断できる事項で、かなり広範な情報を提供する。

◎これらの運用によって様々な角度から病者の疾病の関する情報が得られる。これらの情報を総合して考察を加えて後はじめて「その病についてのイメージを形成する」＝「その病を医学的に認識する」ことが出来るのである。